

会長就任にあたって

佐野 信雄

東京大学工学部教授

歴代の会長の諸先輩に比べて、経験、識見、年令等どれをとりにしても見劣りするの明らかでありますし、私自身大学での活動期間が終わりに近づき気分的にもゆとりがない時期であります。理事会の御指名により、責任ある会長職を躊躇しながらもお引き受け致しました。

会員の皆様には御存知の方も多いと思いますが、平成7年度より、本会創立80周年を機に、リストラ80を実施すべく、着々と準備が進められております。私の認識では、協会の活動を強化し、かつ魅力のあるものにするために、二つにまとめ、個人の研究開発活動は学術部門に、業界の技術開発活動は技術部門に集約し、それぞれの部門毎に自由闊達に活動しようとするものであります。

このうち、学術部門の設立は全く新しい企てでありますし、その成功はリストラ80全体の成功のキーを握るものですので、以下に私の認識を述べさせていただきます。

学術部門では個人の会員の皆様すべてが、企業に属するか、大学に属するかを問わず、自由に議論できる場を専門分野別に、用意したいと考えております。つまりこの部門は協会の中での学会活動を行うところであり、会員個人のボランティア活動が基本であり、経費の面でも会費収入を大幅に越えた活動は、他に収入の道を講じない限り不可能であります。しかし他からの収入が得られるよう努力すれば、自主的に活動費として使えますので、維持会員からの一定の補助を前提とした独立採算の下に、企業、大学に属する同じ分野の方々が、今まで以上に、交流できることとなります。余談ではありますが、私自身は同じような趣旨の下に活動をしている日本学術振興会の製鋼第19委員会のお世話をしていますので、似たような組織として本協会との役割分担について、検討しなければならないと思っています。

ミニ学会の集合ともいべき学術部門の共通の認識としては、私は、鉄鋼協会はその名前通り、鉄鋼と周辺分野を対象にし、他の学協会、特に関係の深い日本金属学会とはひと味違う特徴を持つべきだと思います。そのキーワードは「工学」ではないでしょうか。原理原則を追求するのに終わるのではなく、それらを組み合わせ、物を作るあるいは作り方を制御するといった応用面を重視すべきだと思います。その理由は単純でして、鉄を作ったり使ったりすることを専門対象とした学会は他にないというのが強みだからです。

どのような学会でも、個人が会員になる動機は何らかの

メリットを得ようと思うからです。例えば、ある種の情報を得ようと思えば、それを提供する別の人が必要です。つまり、学会は情報交換つまり、give and takeの場であり、従って互助組合的性質を持っているものです。得だけをしたいと思っている会員だけでは、会は成立いたしません。このような当然なことを再認識して頂き、会員の皆様に、ボランティア精神を持って協会の発展に積極的に御協力をお願いするとともに、大いに会員であるメリットを享受して頂きたいと思っております。学協会はおひとり、おひとりが支えるものですし、事務局は運営の手伝いをしてくれるのに過ぎません。このためにも、会の運営に携わるものは、透明度の高い運営をし、どなたにも参加できるような場を提供する責任があるものと考えております。

次に技術部門について触れさせていただきます。現在の不況下では一企業では大きな開発を賄いきれないと伺っています。従ってこの部門が共同技術開発のための大プロジェクトを提案する場になることを願っております。もちろん企業間の情報交換の場でもあります共同研究会は整備した上で、従来通り活動を続けて頂きたいと思っておりますし、企業が特に必要としている特定分野での産官学の共同研究開発の場を提供することも重要だと認識しております。

新しい企画としては、大学における鉄鋼研究者を維持するために博士課程の大学院学生を助成することを考えています。又、本誌、「鉄と鋼」についても、改善の方策が検討中と伺っています。講演大会の運営も変わるかも知れません。つまり、色々な角度から、協会の活動すべてが見直されています。既に鉄鋼技術情報センターの業務に関しては、情報の流通スタイルの変化への対応と費用対効果の観点から、その機能を大幅に縮小することにしましたし、標準化センターは鉄鋼連盟と一本化することに致しました。このように新規活動を行うためには従来の協会活動の内容、事務局のあり方等を根本的に再検討して、限られた財源を有効に活用する努力をしたいと思っております。一方、本会の学生会員数は他の学協会に比べ、極端に少ない('94年4月末現在247人)ので、3倍に増やせればと思います。是非関係の皆様御協力をお願い致します。

私は、会長として物議をかもし出すようないろいろな提言をして、リストラが成功するような議論の場を盛り上げたいと思っております。鉄鋼が次世代の会員に魅力的な分野であるように又日本の鉄鋼技術が末永く世界をリードするよう頑張ろうではありませんか。